

真生

第五卷 第六號

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

□ 靜に人生の一生を考察すれば、今日の私共は今尙生死の中
の一生でないか。乍然如何なる意味での一生であらうぞ。

□ 或は肉慾の爲めに其の日を送つて居る人々もあらう。或は
又、金錢本位の爲めに其の日を費してゐる人もあるかも知れ
ぬ。其の他名譽の爲めに、女の爲めに其の日その日を引づら
れてゐる人も多いであらう。

□ 然乍ら、畢竟かゝる生活が一体私共に何の眞意義を爲すの
であらうぞ。それはたゞ其の日その日を死の門に向つて進め
るのみではないか。死ばかりは貧富を論せず、老若を問はず、
貴賤男女の區別なく等しく受けなければならぬ人生の事實で
あるものを！

□ 然に今時の人たちは何故に是の死のあるのを知らぬであら
うか。如來の御光に遇はず、價值の生存を知らずして、多く
は徒らに死の門に急ぐ。

□ 友よ、私共は先づ此の死に就て知らねばならぬ。死は永生
の入口である。人は食ふのみが能でもなく、食ひ死にするのが
能でもあるまい。そこには不死と價值との生活が必要である。

□ 然に友よ、多くの人々はたゞ食ふ爲めに生き、死ぬ爲めに
食ふでないか。乍然それでは眞實の人生を心から樂しむこと
はできないであらう。ましてや、毎日自己を偽り、人を虚き
非道の生活にのみこれ事とするに於てをや。

□ 見よ、悠久たる天地の相を！ 見よ、眞人の理想の彼岸を！
そこには常に求めて止まない眞實の世界があるではないか。
眞實の世界は永生の世界であり、又神の世界である。(念)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◆ ◆ ◆

目次

◇ 如来さまは何處に見えます

越 子

◇ 人生より宗教の價値に就て

土屋 觀道

◇ 如是我觀

佐藤 忠義

◇ 高松高等商業學校

佛教青年會説立に就て

堀江 義廣

◇ 旅行日程(六月の部)

觀 道

◇ 三味會案内

▽法に眞宗だ、禪宗だ、淨土宗だと有るのでない、又佛教だキリスト教だと二つのものがあるのではない。法は一相一趣一味である。是れを觀る見方に種々ある、這入て行く道に種々ある。

▽恰度一つの富士山を百方から見登て行くのに各々の深みがあるやうなものである。それを富士山の前にはいつも松原と海とが有るもんだと思つたら大間違である、總てを見透した上に一に立たねばならん。

▽法然上人が『各宗に一切經あり』と云はれたのは實に卓見である、これであつてこそ眞に念佛の一道を渡れる、念佛の一道の中に大悲の全分を味て行ける。

▽その念佛とは何か、觀念の念ではない、念の意味を知つた丈けの念でもない、本當に如来さまが信じられたことである本當に如来さまが信じられる——此外に念佛もなければ信仰も無い。

△佛を信じられた。といふ事は、佛に生かされることである佛に生かされることは佛の示しを自らに爲し得ることである。

(越子)

◆ ◆ ◆

如来さまは何處に見えます

◇ 如来さまは何處に見えます？

◇ こゝにみえます。スグ其處に、あなたの目の前に黙つて立て居られます。そしてあなたの爲ること、成す事一切をジツと見て居られます。今あなたが腹の中で何を思つてるかまで御存じです。何處まで逃げて行てもチャンと前へ廻つて來てみえる、どんなに隠れてしたつもりでもチャンと總てを知つてみえます、本當に如来さまはいつも闇の中から黙つて見てみえます。

◇ あなたには如来さまが見えませんか、莊嚴な溫顔に無限の慈愛を湛めて、子等を幸あれ正しかれと一心に念じてゐて下さる、その念力に護られ溫ためられて私等は自然に良くなりつゝあるのです、私達は自分で善くなりたいと氣附いてゐる事は澤山あるが、それが仲々自分は改められない、而し此の如来さまに養はれ育てられて、段々善化して行き、人間が軽く澄んで來ます、そして淨化するに就けて飛躍高跳するやうになります。それが不知不識の内に裡から如来さまの心に生かされてゐる證據です。

◇ 自分の裡から自分ならぬ如来さまの心が生れて下さる、そして其の力の爲めに自由自在に自分が操られてゐることを感じます。最早自分の裡に斯く成り在ます如来さまを付うすることも出來ぬ、そして『徳本が佛になることは出來ぬが、佛が徳本になつて下さる』と云はれた如来さまの誕生となります。

◇ そしてその徳本は、『我を見しものは父を見しなり』、神に聞かんとする者は我れに聴けといふイエスの自覺と尊嚴とになる。爰に至て如来さまとは自分以外に在る置物でなくなつて來ます。

◇ 此の權威と輝きとの中に在てこそ眞の大歸命の念佛が切々に湧きます。自己を念じ衆生を念じ、其の最善を盡して居るか『我等の一なるが如く彼等をも一になし玉へ』『み旨よ茲に現はれよ、み國に爰に來れかし』と嘆稱嘆念せざるを得ません。(越子)

人生より
見たる 宗教の價值に就て

土 屋 觀 道

(一) 人生の價值

どんな生活をする事が本當に人生としての價值であらうかは實に私にとつての永い間の悔みでありました、乍然一度私の信ずる念佛の一行に入つてからは忽然として此の疑問が私にはなくなつて、人生の一生は要するに此の念佛に歸つて念佛の心で一生を貫ぬくことだと云ふことが判然として輝いてゐるのであります。

念佛の心

かく云へば或る人は云ふかも知れませんが、念佛が何だそれでは人はたゞ念佛する爲めにでも生れて來たと云ふのか人は念佛の爲めの人であつて、人の爲めの念佛ではなくなるではないか、それでは人は全く念佛の奴隷であつて、人の爲めの人ではなくなるではないかと。一應此のことは實に又人生の一真理である。乍然念佛の爲めの人生か、それとも人生の爲めの念佛かは見方によつて兩者とも成立し得ないものではないが、それよりも先づ私共のこゝに承知すべきの問題は抑も人生とは何を意味するか、人生の意義如何である。

人生の意義如何

友よ、私共がとにかく人として此の世に生れて來てゐることは何よりも疑ふことのできない事實であらう。そして私共は小さい時から慈母の懷で乳を飲み、生長するに従つて段々少年中年老年を過ぎてこ

の一生を終る時が來ることも實に又いなむことのできない一つの事實でないか。その間には嬉しいこともあり、悲しいこともあり、また年頃になつては男女の性愛も心に起り、又時としては夫婦の愛、兄弟朋友、親子の情愛もお互に味ふこともあるのであらうが、而も私共の周圍と私共の關係は如何であらう。或は個人と個人との關係の如き、或は個人と國家の如き、或は個人と社會との如き、其の他家と家、國と國、或は自然と人生の關係の如き、更に宇宙と自然、宇宙と人生に考へ至る時、私共の人生の一生が永遠の人生や無窮の世界を考へてこの現實の一生を反省し來たる時、私共の一生が果して何を意味するか、又果して何を爲すべきか靜に思へばうたゝ人生の行路を眞劍に考へざるを得ないものがあるかに思へてならぬではないか。

友よ、キリストは『人はパンのみにて生くるものにあらず』と云つたと聞きます、乍然一度でも私共がこの悠久窮り無き宇宙自然の大なるに氣づき、又一度でも私共人生が此の大自然の中に生存してゐると云ふことに氣付いたならば、かゝるパンのみが決して人生でないことはキリストを待たんでも明かなことでありませう。或る社會主義者は此の基督の言に對して、人はパンなくしては生くるものにあらずと云つたと聞きます。乍然、これはキリストとの言葉を惡意にとつた言方に過ぎないので、キリストがたといさう云つたからとて、人はパンなくして生きると云つたのではありません。さうして又キリストはパンの生活を卑しんだのもありません。けれども、友よ、例い私共が一生食ふに困らない人生であつたとしても、それだけで果して私共は眞の幸福を感じる者でありませうか。此の意味をキリストは

衣食住の 動物的生 活のみ

一切の物を
載せて
次々次々
移り行く

人はパンのみにて生るものにあらずと云つたのです。パンのみにてとはパンばかりでと云ふことで、つまりパンとはこゝでは單なる衣食住の動物的生活のみでと云ふことです。いはゞ信仰なくして、人は生きられるものでないと云つた言葉だと私は信じます。言換れば人の一生はたゞ牛馬のやうに一生食へてゐる居れば、それでよいかと云ふに決してそれだけでは生きて行けない、眞の人生は神なくしては眞に生きて行けるものでないと云ふことになるのです。人が一生食ふことによつて、五十年か六十年で死ぬとします。そして私共がやつぱり其の中の一人とします。『生れて死ぬる』事は至つて判然としてゐる、乍然自分が愈死ぬるとなつたならどうでせうか、事は至つて簡單ですけれども自分にとつてはさう簡單に行かぬものではないでせうか。自分の敬慕して止まなかつた父母もかくて死しなつかしい兄弟も遂に逝き、朋友も亡くなり、妻子も無くなり、自分も亡くなるとなつて來ては宇宙の本源を知らざれば人生の一生は決して楽しいものではありません。而も悠久たる天地自然の風光を見ますに、さうした人生の一生を地球に載せて、次から次へと永劫に移り行く自然の姿、一切を載せて宇宙は沈黙の中に動いて止まぬ有様であります。

(二) 見ゆる世界と見えざる世界

神が人を創るのか、人が神を創つたのか私はそんな事は知らない。乍然此の大自然の中に私共が生れて來てゐることは疑ふには行かぬやうに、さうした事實を私共の心の中に之を認めてゐることも疑ふことのできない事實です。して見れば此の宇宙の見ゆる限り、否恐らくは見えざる彼岸の世界までも私達が之を信する限り、其の信すると云ふ信の事實は私共の心を離れて存在するものでもありません。

言換へれば一切の是等の宇宙現象は悉く私共の心の上に現れたものであると云ふことができます。從て一切の宇宙は私共の心に映じたものであると云ふこともできます。

乍然それかと云つて、之等の一切が私共の心で勝手に創くるべきものではありません。そこには私共の創らうとしても創ることのできない宇宙自然の法則のあることを私共は認めざるを得ないものがあります。否それどころか一面私共の身も心も否、凡そ宇宙の一切の現象は皆悉く此の宇宙によつて創られないものはないかに見えますそれこそは見えざる力、見ゆる力の根源として、あらゆる萬物の上にも及び無限の力と法則とあらゆる恵みの源が宇宙に漲つてあるかに見えます。命の源、生の泉、汲めどもつきせぬ宇宙の本源、靈の世界神の世界とでも私共は申しませうか。

友よ、人とし人と生れ來て、此の國を見ないものは不幸であらう。見ゆる世界と見えざる世界、而も見ゆる世界は見えざる世界を包み、見えざる世界は見ゆる世界を包んでゐる。見ゆる世界も見えざる世界も本來一如の相である人若し一度でも此の見ゆる世界を通じて、見えざる世界を見るならば、永生の光は萬有を包み不滅の自覺はそれこそ天地に充つてであらう。永遠の生命もそこから出で、不死の世界もそこから生れる。人は一生の中の一生にあらずして、正に永遠の中の一生であり、限りなき喜びと望みと力との源が私共の上にも流れて來るのを覺ゆるであります。逝く春も來る夏も、秋も一として限りなき自然の風光でないものはないのであります。單なる世界は生滅の世界であり、又無常悲衷の世界でもあります。乍然見えざる彼岸からさして來る永劫の光に照さるればそれらの世界も亦常住の相となり、歡喜無限の望みの世界と變つて來るのを覺えませう。

(三) 永生の光

されば友よ、私共の人生はたゞ見えざる光に生るのみであります。見えざる光とは無限の彼岸よりさして来る如來様の御光を言ふのです。宇宙の本源にまで心をして往かしめよ、そこには限りなき常住の光が永劫に輝いて、私共の来ることを待ちわび給ふ聖なる御國があるのであります。私たちは現在のみでは生きることができません、況してや過ぎし過去の生活が何で眞實を意味しませう。

宇宙は宏大であり、又無邊であります。而も此の宏大にして無邊なる宇宙の發展運行はあらゆる萬物の進展を示し、日夜に進んで止まない進化の道程は私共の行手に一大光明を放つて居ります。尤も一部の天文學者は此の宇宙の宏大を説くと共に亦その有限を説いてゐます。又一部の生物學者は生物の進化を説くと共に進化の行詰りを語つてゐます。而て靈の世界や、佛の世界を無いものにして宗教の生活を迷信とさへ考へてゐる人もありますけれども私共の世界にはそれらの世界を更に超えたる神の世界があり、佛の世界が嚴然として存することを知らねばなりません。萬有の本源だの、宇宙の生命だのさうした世界は已に科學者の云ふべき範圍を超えてゐます。そこは即ち宗教の世界哲學の世界であります。永生の自覺不死の生命に至りましては已に哲學の範圍も超えて愈宗教の世界でありますものを、神の御國佛の淨土が何で科學者に判りませう。神密の世界人格の彼岸は單なる物理や、化學の世界では現はれて來さうありません。綜合せられた宇宙の生命は分拆せられ行く單なる五感の對象ではないのです。多くの宇宙の進化論や生物進化の科學的論證は其の科學的證明の範圍に於て私共はその科學者の云ふ所に最も尊敬を表します、乍然それ以上の範圍を越れた科學者の推論を斷定はさううか／＼と之を信ず

ることはできないのであります。云はゞそれは科學の範圍を越えるのであつて、それらの世界は又此の科學研究の以外に哲學若くは宗教の範圍に讓るべきものであるからであります。從て友よ、私共の心の世界は單なる科學的心理の働きばかりで止むものではありません。萬有の本源としての宇宙の眞相を見やうとします。又それのみならず、自己そのもの、何物であるかを研究して自我の當體までをも直觀しやうとするのであります。

(四) 我とは何ぞや

我とは何ぞや、之は外に向つて宇宙の眞相を知りたいのと同じ程度に於て、否或る場合にはそれにもまして我そのもの、何者であるかを知ることが更に重大なる或る意味が含まれてゐるのであります。我とは何であるか、一言に云へば我とは自分のことである、他にあらず我である。而も眞の我とはかうして筆をとつてゐる私、かうして考へてゐる私、それは眼にも見ることもできねばまた手にも觸れることのできぬものであります。乍然眼にて之を見、手にて之を觸つてゐるものは私そのものであります。仰で天を眺め、伏して地を歩むものは私でありませう。而も此の私は五感の作用によつて知ることのないものであるとすれば私共は眞の我が如何なる相のものであるのか如何なる働きを爲すものであるかも直接に之を知ることができません。それは肉眼によつて見つゝある主觀そのものであつて、肉眼の對象となるものでないからであります。而も此の私は果して宇宙自然の現象界に屬するものでありませうか。或はまた全くそれらを離れて夫れ以外の他の世界に屬するものでありませうか。私共の知り得た多くの宇宙の現象は主として五感の作用によつてのみ知り得た所のものであります。乍然宇宙の一員たる私共

に五感の作用によつて知ることのできない言換へれば五感の作用によつて宇宙の現象を知りつゝある私そのものがあると云ふことはそれだけ宇宙には私共の五感の作用で知ることのできない方面もあると云ふことを知らねばなりません。従つて此の宇宙に私共の五感によつて知り得る世界以上に更に別な意味での或る世界が存在してゐることを否むわけには行きません。否少くとも私そのものが一切を見つゝあるものとして生きてゐることを否むわけには行きますまい。今此の現象として見られつゝあるところの方面を私そのものに對して假に名づけて客觀若は客體と云ふのでありますが之に對して私共そのものを主觀若は主體と云います。然ば其の主觀即ち主體そのものとは一體何者であらうか、通常我といひ自我と云ひ、主我と云ふのも此のものゝことに外なりません。然に今我といへば此の我そのものであるものでありますが、此の我はたゞ單獨に我として存在するものでなくして、客觀を待つて初めて意識せらるゝやうであります。又時によると全客觀は此の全主觀の上へのみ現はれてゐるのだとも見えるのであります。又一面からは本來主觀客觀は相對的のものであつて而も常に入離不分のものであるとも見られるのであり、又見やうによりましては主客一如であつて主客として二つに分けるものでもないかにも見えますけれども亦普通に私共と云ふ時の私共は我の中に多くの人類を意識して、其の中に於ける此の肉身と共にある一私と云ふものを見てゐる時が多いのです。従つて私共が生れたの死んだのと云つてゐる場合には此の肉體に即した身心の一體を私として見てゐるのでありませう。中には亦私が此の肉體と共に不死するものと思つてゐるものもありませうし、又或る人は此の肉體が死ぬ時私共は此の肉體を離れて他の世界に往くものかのやうに考へてゐる人もありませう。

(五) 眞 我 の 生 活

けれども今や私共はさうした考へも要でなくなりました。私共はそれが何んであらうと、今やあるやうにしかあらぬのだ。それよりも之から我等は如何にあるべきかの方面に向つて眞に生きるのが私共にとつての何よりの急務であると思ふのです。然ば私共は之から如何に生く可きでせうか。私共はそれをこそ先づ知るべきであり、又それにこそ生く可きでありませう。

友よ、私は此の宇宙の如何に宏大にして又無邊なるかを重ねて思はざるを得ぬものであります。而て此の宇宙こそはあらゆる一切萬有を包括して無限の過去より無限の未來に向つて一大活動を爲してゐるものと思はれません。而も此の宇宙たるや、恰も私共自由に私共の生命あり、生長あるが如く、私共の本源として又宇宙には宇宙の生命あり、生長ありと思はれません。無限の力と法則とが是の宇宙には充ち満ちてゐます。之によつて一切の萬有は恵まれてゐます。或る人は之を以つて單なる獨斷的擬人法に過ぎぬと云ふかも知れませんが。乍然それは決して私の心を云ひ當てた云ひ方ではありません。凡そ此の世のあらゆる現象に於て、それが宇宙を離れて何がありませう。私共の心の現象及び主觀作用の一切までも私は一切をこめてそれらを宇宙の一現象、一働きであるとしは見られませんが。従つて人類の一切の現象進化の法則もまた宇宙精神の一發露としは見えぬのであります。私は之を名づけて神と云ひ之を名づけて佛とします。

乍然その人類の發達及び其の活動が宇宙現象の一部であり、宇宙精神の一働きであるからといふので人類の生存を直に神と見たり、或は佛であると思ふやうとするのではありません。否私共の生活は斯くの

如くに人生の一生を宇宙精神の發現であるとするによつて初めてそこに眞に意義を爲し、又初めて眞に生きることができるのであります。いはゞ宇宙と萬有とは一體であるとの信仰であります。従つて宇宙と萬有とが一體でありますからして、宇宙と萬有とは寸毫も離るゝことのできない關係にあります。宇宙と萬有とが一體にして不離であれば宇宙が時空に渡つて永劫に進展止まざる活動であつて萬有の變化はそのまゝ宇宙進展の活動に伴ふ變化に過ぎないことになるのであります。従つて一切の現象は悉く公私一如の活動の當體であります。また、萬有個々の現象も、宇宙一如の進展の上に常住に相關しての現象でありますから、一が一切に及び、一切がそのまゝ一に現れてゐるのであります。

茲に於て私共の生く可き道も亦自ら明なることであります。即ち私共の各自の生活は宇宙と一體の生活であればよいのです。我他彼此の見解も要するに宇宙進展の爲めの現象なれば現象そのまゝが萬有進化の過程と見られ、やがて一視同仁の無差別平等の大悲の心に生きるやうになる事が更に高次の進展であることを知るに至りませう。茲に於て私共の生活は一切が自由に許されたる眞の自由の生活があつて許されざる心知のものはまたそのまゝが許されたるの世界であります。而も此の間、私共の生活は各人の生活意義の上に宇宙統攝の眞理を求め日々夜々に向上の一路を求めて止まない精進の心に勇むものあるを覺ゆるのでありませう。萬古を貫ぬく人生の一生は永劫つさせぬ如來の大道に自らを立てずには止まない眞理が輝いてまいります。如來の大悲に心から合掌して専心念佛せずにはゐられない、大悲龍恩を感ずるの時もそこからまいります。神を祈るの心、即ち如來を念ずるの心も此の所から來るのであります。疲れたるものは慰ふべし惱めるものは安らくべし。一として如來の慈光の中ならざるはないから

であります。永生の國常住の世界不死といひ極樂といひ、淨土といひ涅槃といひ天國と云ふ一に皆この宇宙の本源たる如來の御國を云ふに外なりません。神人一体とか佛凡一如とか、天人合一と云ふ境涯も此の如來に南無すればそこより現はれて來るのであります。

眞といひ善と云ふも要するに此の一如の世界を見たものの初めて云ふことのできる所であります。聖なる神の生活も限りなき如來の慈光に生きたるもの、換へ言葉に過ぎません。眞生の世界とは即ち念佛の世界であります。念佛なき世界に眞生の世界がどこにありませう。眞生の世界は望みの生活であります。又永生不死の世界であります。喜びと望みと力との如來を中心とした人類最高の神の生活であるのであります。(六、四、午後五時)。

如是我觀

佐藤 忠義

■若し人ありて直に南無阿彌陀佛と、なりきるを得たるときは、焚燒する香爐の煙煙、大宇宙に遍満すと自覺し、我が捧ぐる一枝の花、十萬億の佛を供養せりと自覺し、我が稱名念佛三千大千世界に透徹せりと自覺す。

■如斯自覺せる人は、極樂國土の衆生たるなり。■極樂國土の衆生たりと自覺せるときは是れ即ち往生せるときなり、是れ即ち眞生せるときなり。

■極樂國土の衆生還りて本國に到り飯食して行ふところは佛道なり。

■是のごとき人、飯食するところ、是のごとき人行ふところは是のごとき人、住するところ、是のごとき人、座するところは是のごとき人、臥するところこれ、この人の本國にして、如來の聖意を三業に現はすところなり。

■眞の理想は、宇宙とともに不滅にして、宇宙の力必ずこれを實現せしむる理想なり。

■是のごとき理想は一より出で十萬億相となり十萬億相は歸すれば一となる。

高松高等商業學校佛教青年會の設立に就いて

堀 江 義 廣

豫てより要望してゐた本校内に於ける佛教徒の結衆が今茲に高松高等商業學校佛教青年會なる名の下に生れ出でんとしてゐる。私達は此の結衆を通して人生に於ける最高の理想の如何なるものなるかを共に深刻に確知し味ひたいと思ふ。

兎角人は其日、其日の生活に追廻されて行き易い結果として、永遠の理想を忘却する時が決して少くない。果して、永遠の理想に目醒めずして眞に生きる事が出来やうか。又どうして此のやうな生活に人生の眞に享樂し得べき點を發見し得るか。少くとも私達は眞の宗教眞の信仰に目醒めない限り、またと歸らぬ人生の尊い一日を有意義に過し得ないものであると思ふ。尤も論者或は説をなして次の如く言ふかも知れない。即ち世には其日其日の生活さへも十分に出来ず働かうとしても満足に働くことが出来ないうで苦しんでゐる者のあるにも拘らず、永遠の理想だの、やれ眞生の生活だのとはやし立てゝそれが何の役に立つかと。一應は道理ある議論の如く考へ得られるが未だ以て肯綮に中つた説とは思はれない。何故ならば單に其日其日の生活に追廻されて所謂日暮しの生活をして行くのみでは、本心の願を満足せしむるものとは言はれないし、又其處には何等永生の光の輝きを認め得ないのみならず、眞生の自覺も有しないからである。かくの如く觀じ來ると、どうしても價值ある生活、眞生の生活を欣求せずには居られない。價值ある生活、眞生の生活を爲し得る所に、必ずや人類最高の理想が實現されて來るのである。而して其處には滾々として限りなく涌き出づる至幸至福の泉が存在する。然らば價值ある生活、

眞生の生活とは何であるか。私は其を目して、宇宙の本源たる永遠の生命に生き、日夜に進んで止まない人生の幸福に向つて眞に生くること、即ち眞人の生活であり眞の信仰を中心とした生活であると言ひたい。一言にして盡せば眞善美の生活である。然るにこの眞善美の生活を爲さんと欲するにも不拘、人は兎角偽惡醜の爲に煩はされて其進路を阻まれ勝である。而して此の偽惡醜なる迷雲を蹴破つて眞生の生活に突進する所に淨土欣求が白熱化せられるのである。眞人としての生活をなし得ること其自身既に佛陀としての生活を行ひ得る第一歩にあるものと言はなければならぬ。茲に於て始めて、眞の意義に於ける見佛の域に達するのではあるまいか。(茲に所謂見佛とは幻影的見佛の謂では決してないことを堅く斷へて置く。) 然らば見佛の域に達する方法如何。茲に聖道門の難行自力と淨土門の易行他力との二つの方法が存存する。而して、私達は此等の何れを探るべきであるか、或は兩者を併用すべきであるか、或は又二法を折衷して其の長を採り短を捨つべきであるか。此の中の何れを決定するかに就ては今暫くこれを措くとするも、嘗て土屋觀道上人が『眞に生くべき方法は如來への合掌を措いては外にない、合掌とは即ち念佛のことである。宇宙の本源たる宇宙の眞理たる佛の心に生きずして、どうして眞實に生きたれやう佛に生きたることは眞に生きたることである。如來を離れて眞はなく、神を離れて自己はない念佛は即ち自己に生きるの姿であり、如來に生きるの合掌である』と言はれた言葉は私達の熟讀頑味すべき言葉であると思ふ。

私が茲に佛教青年會の設立を提唱するに至つた所以のものは實に宇宙大生命の發現であつて、決して單なる私一個人の發現ではない。私達の結衆は宇宙の眞理に生きんとする生命の躍動であり、又生命の叫びに外ならない。即ち一切の生命の躍動であり又生活をして理想實現の域に到達せしめんとする自覺が實際生活の上に現はれ、其結束として、茲に眞人たんとする者が相集つて此の青年會を結ばんとするものであると言ひたい。故に意味に於て私は諸兄と共に永遠の生命に生き、無限の向上を圖つて行か

んとするものである。換言すれば、不死の自覺を得ると共に、人格完成價値の生活を相共に顯得せんとするものであると言ひ得る。

如來の大慈大悲の裡に、育くまれて、絶對慰安の中に成長しつゝ限りなき永遠の望と、力と法悦とに満ち充たされた理想實現の生活、即ち真人の生活を享受せんとするものの結衆こそ眞に意義あり、心強いものであると言はなければならぬ。此の意味に於て此の青年會が結ばれる事が人類の幸福に多少なりとも貢獻することを信じて疑はぬ。従つて私達の結衆の單なる意味の集合でなく宇宙生命を意識し、眞の信仰に覺めんとすでもの團結であることを承知して載きたい。

次に掲ぐる所のものは我が高松高等商業學校佛教青年會の設立趣意書、綱領並に規約である。

趣 意 書

現代の青年をして眞實に目覺めしめんが爲に茲に高松高等商業學校佛教青年會が設立せられるのである而して此の結束を通じて如何に吾人の靈性を育くみ解脱の輝きを握ると言ふ事が人生最高の理想であるかを相共に深刻に味はいたいと思ふ。凡そ我々人間には『よくならない』『死にたくない』と言ふのが本心の願である。『よくならない』とは即ち無限の向上の要求であり、『死にたくない』とは不死の要求であり、不滅の要求である。而して、此等の二つの要求が人間の根本的要求であると考へる。更に換言すれば、不滅の自覺と人格完成、價値の生活との要求である。而して、他面これが吾々の生くべき理想であると言ひ得る。此の理想を實現し行く所に眞の生活は現れ、意義ある人生を享受し得るのである。かくて眞善美の生活をなし得る所に佛陀としての、將た神としての、生活が存在する。正に真人の生活とは動物的生活、經濟的生活を通じて精神的生活を主たる基調としたものでなければならぬ。即ち眞

の信仰を中心とした生活でなければ何の役にも立たないと思ふ。人格は信仰の反映であり、凡そ的人生問題は信仰を中心として解決せらるべきであらう。真人たるの生活をなす所に天國は開示され、淨土は顯得せられるのである。そこに光明攝取の力を認め得る。

我々は無限に廣がれる大宇宙の一角に立ち無限に連なる永劫の一時時に生き行く一個の人間であるそれは單なる一存在にあらずして、潑潑たる一生命として祖先よりの結晶であり、過去に逝きし凡ての時間と凡ての空間との總勘定である事を了知するときは自己の尊貴と使命の偉大なるに驚嘆せずには居られない。

人間として生きんとすれば眞に生くべきは勿論、眞に覺醒すべきである。人生活動の源泉となり、向上發展の指針となり得るものにして始めて信仰と謂ひ、宗教と謂ひ得る。斯くして、それは我等に永遠の生命を自覺せしめ、無限の向上を與へ、我等をして價値ある人生に自覺せしめ、身心共に光明裡に活動せしめる限のあるものでなくてはならぬ。

茲に我々の眞の生命があり、眞の法悦があり、眞の力が自覺されるのである。我々の實際生活を離れて宗教問題は存在しないのであるから、眞の宗教、眞の信仰に目醒める所にまたと歸らぬ今日の尊い一日を如何にすべきか？ の問題の出發點がある。これを眞に生きる第一歩であると言はなければならぬ。本當に生きんとする我々は矢張り全体の中の一なるが故に、全体と共に凡てが淨化し行き、覺醒し行き、改善せられて行かなければ本當に生くる佛陀の世界、神の國は顯現せられないと思ふ。

如上の意味よりして、茲に眞實に生き行く者が二人となり、三人となり、五人となり、七人となり、十人となり、かくして全体となり行くべく此青年會が結ばれるのである。

オ、一人眞實に生くる所に一家榮え、一家生くる所に一市榮え、一市生くる所に一國榮え、一國生くる所に世界榮え、世界生くる所大宇宙は榮え行くべきものであると信じて疑はぬ。かるが故に、微少な

りと雖も衝天の意氣と壯嚴なる正義と平和なる人類愛とを感得せざるを得ない。
希はくは、諸兄よ！共に俱に手を携へて眞實に生きやうではないか。
オ、宇宙の本源たる永遠の生命に生き、日夜に進んで止まない人生の幸福に向つて眞に生きやうと思ふ人々よ！我等に如何にして此の眞生を完ふすべきかを眞に求むべきものではなからうか。

綱 領

宇宙の本源たる永遠の生命に生き、日夜に進んで止まない人生の幸福に向つて眞に生くると共に、未だ醒めざる同胞を立たしめ、相携へて成就衆生の大業を達成せんと思ふ。

規 約

- 一、本會は高松高等商業學校佛教教青年會と稱し事務所を高松高等商業學校内に置く
- 二、本會は永遠の生命に生き無限の向上を圖らんとする者のみを以て組織す
- 三、本會は左の事業をなす
 - (イ) 講演會
 - (ロ) 修養會
 - (ハ) 研究會
 - (ニ) 懇話會
 - (ホ) 其他眞人としての生活に資すべき事項
- 四、本會には左の部門を置く
 - (イ) 庶務部

(ロ) 講演部

(ハ) 宣傳部

(ニ) 會計部

五、本會は必要なる經費、寄附金並に特別收入金を以て之に充つ

六、本會の役員を別つて左の如くす

(イ) 特別會員 本校職員

(ロ) 普通會員 本校生徒

(ハ) 賛助會員 本校職員生徒に非ずして本會の維持後援をなすもの

七、本會各部門に部長及び幹事若干名を置く

部長は特別會員中より互選す

幹事は普通會員中より互選す

八、本會の會費は左の如く之を定む

(イ) 特別會員 壹ヶ年金貳圓四拾錢

(ロ) 普通會員 壹ヶ年金壹圓貳拾錢

(ハ) 賛助會員

但し會員は二期に分納するものとす

九、本會は毎年一回總會を開き會務及び會計の報告をなすものとす

但し必要あるときは臨時總會を開くことあるべし

十、本會々則は總會の決議により變更することを得

擱筆するに當つて、一言して置かなければならないことは、私の提唱の中に流れてゐる根本思想が永遠

の生命と無限の向上との二つより成立つてゐることである。即ち眞生主義の一貫した論理に立つてゐること即ちそれである。而して性來愚鈍なるものと云へ、又淺薄皮相的な見解の持主であるとは申せ、土屋觀道上人の念佛三昧を基調としたる所謂眞生主義によつて教化せられたことは非常に多い。如來の慈光裡に法悦歡喜の學究的生活を送らして載けることはミオヤの恩寵によるものであるが、他面眞生同盟の諸兄の指導と鞭撻に基く所大であることを附言して聊か謝意を表する次第である。(一九二六、六、一)

旅行日程 (六月の部) 觀道

- 四日 東京座談會。
- 五日 東京出發。
- 六日 大阪畫長圓寺。夜青年軍人聯合會。
- 七日 岸和田、正覺寺、講演會。
- 八日 太阪市役所樓上。夜豊田氏邸。
- 十日 高松高等商業學校豫定。

- 十二、三、四日 神戸再度山々上三昧會。
- 十五日 大阪夜貞松院座談會。
- 廿一日 名古屋崇徳寺婦人會。
- 廿二日 静岡縣燒津光心寺座談會。
- 廿三日 全清水港實相寺座談會。
- 廿四日 岐阜市本誓寺三昧會(夜)
- 廿五、六、七 大垣市淺沼銀行樓上、佛教講座。

◎唐澤別時三昧會案内

- 一、七月二十二日より二十八日まで七日間。
- 一、前日午後五時頃までに、上諏訪驛前の旅館に待合せます。
- 一、今度は人数があまりに多いやうですから、前以て御申込みを願います。百名を超えます時は其後の申込は乍遺憾御斷り申す。

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼 土屋 觀道
發行人 眞生
東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所 眞生社
東京市芝區三田四國町二番地二號
印刷人 三井 清次
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所 精進堂印刷所